

春である。

風が和らぎ緑は芽吹き、夜の闇も少しだけ優しくなる季節である。着物を一枚減らすことで、肩の荷を下ろしたように自然と足も軽くなる。

そうなるよ、つまり。

酒が美味い。

木枯らしに追われ、自宅で熱燗を舐めるのも乙だが、陽気に浮かれて足を伸ばし、馴染みの顔を肴に飲む酒はやはり格別といえよう。

冷やでも熱燗でも、その日の気温と気分で選べるのもいい。

選択肢があるというのは、それだけで幸せなことなのだから。

というわけで紅美鈴が、選択肢のある幸せを存分に噛み締めていた。メニューを片手にああでもないこうでもない鹿爪らしい顔でうんうん首を捻っていると、

「どうでもいいけど早く決めてくれないかなあ。他のお客さん待たせてんだよね」

「……いいでしょ。久々の休日なんだし、最初の一杯は大事にしたいじゃない」

若干気まずそうに反論したものの、妹紅にじろりと睨まれ慌ててメニューに目を落とす。

ここは竹林の片隅にある、小さな居酒屋だ。

元は夜雀がやっていた屋台だったのだが、不慮の事故で屋台を炎上させた責任を取って、妹紅が自宅を改装し店員として手伝っている。八目鰻に加えて小料理も振る舞うようになってか

らは、客足も増え連日満席の状態だ。厨房からは今も夜雀の調子外れな歌が聞こえているが、ちよつとくらしい目が眩むのも酒のつまみに丁度良いと嘯く常連もいるという。

「確かにしばらく顔を見せなかったね。門番つてのはそんなに忙しいのかい？」

長い髪を後ろでまとめ、割烹着を着た妹紅の姿は男女ともに評判がよく、客足の増加に一役買っていることを妹紅だけが気付いていない。

「仕事自体はそうでもないんだけど……そもそもうちつて決まった休日がないのよ。全てはお嬢さまの気まぐれで決まるしねえ」

「ピラミッド作つてた奴隷にも定休日くらいあつたぞ。ファラオより偉いんか、おまえんとこのお嬢さま」

「もちろん申請すれば好きなかだけ休みをくれるんだけどさ。ただ、用事もないのに休むつてのはちよつと気まずいつていうか……」

「そういうの社畜つていうんだぜ？ で、注文は？」

「……冷やで」

「毎度。串は塩とタレどつちにする？」

「タレでお願いします……」

「あいよ。それでは少々お待ちください」

完璧な営業スマイルを残して、妹紅が厨房へと戻っていく。その髪色と笑顔で咲夜のことを

思い出し、美鈴は小さく溜息を漏らした。

「ほんとなら咲夜さんも一緒だったのになあ」

咲夜はお嬢さまの気まぐれに付き合わされ、朝から神社に出掛けている。仕方のないこととはいえ、前から約束していただけに少し残念だ。館から離れた場所に出向いて、気の置けないガールズトークに華を咲かすのが最近では唯一の楽しみなのに。

「ほい、冷やと串の盛り合わせね。まあ、ゆっくりしていきな」

下降する一方だった心根が、甘いタレの香りにちよつとだけ上を向く。

まあ、嘆いても仕方ない。

たとえ一人でも、久しぶりの休日を満喫するでしょう。

「あー、やつぱここの串、好きだなあ」

夜雀秘伝のタレと独特の臭みがある八目鰻の身が、絶妙に絡み合って旨味を増している。焼き加減も実に良い塩梅で、パリッとした皮とほろほろの身が舌を飽きさせない。濃い味付けに喉が渴きを覚えたところで、冷やをきゅつと流し込む。

「ふいー、沁みるねえ」

すきつ腹に流し込まれた日本酒が、胃壁を通して身体の隅々まで広がっていく。まるで炉に火種を投げ込まれたように、身体の奥からかーつと熱が湧いてくる。多少落ち込むことはあっても、美味しい食べ物と酒があれば大抵のことはどうでもよくなるものだ。間を置かずに追加注

文し、今度はタレではなく塩焼きを頼んだところで、

「邪魔するよ——つてありゃ、随分混んでるな」

暖簾をくぐる声がしてこちらに目を向けると、艶やかな赤髪が目についた。

「へい、らっしやい。おっと、今日は一人かい？」

妹紅が足早に応対に向かう。

「ああ。満席かな？」

「えーと……相席でもいいかな？」

「あたいは構わないよ」

「それじゃ——」

そう言つて妹紅はこちらに目を向ける。

承諾の意を目線で送ると、妹紅は感謝のウインクを返し、こちらに客を連れてきた。

その客は美鈴の対面に座り、長い足を持って余すように組むと「熱燗と串を適当に。お猪口はふたつ」と慣れた素振りです。妹紅に告げてから——美鈴に向かつてにやりと笑った。

「宴会で何度か見た顔だね。名前は……ええと、なんだっけかな」

「美鈴です。紅美鈴と申します。自己紹介は——お互い、まだ、でしたよね」

そう、名前は知らない。

だが、その職業は知っている。

私は魔女。その名もパチュリー・ノーレッジであり、今は小悪魔だ。使い魔である。

「いやいや。使い魔である、じゃなくてですね」

顔色の悪いパチュリーは平手で空気をかき混ぜ、喉に小骨がつつかえたような表情で言葉を探す。対面の座椅子にどっかりと体を預け、本を抱え込んだままの小悪魔は、鬱陶しそうに目を眇めた。

「何よ」

「どういう状況だよ」

「頭が悪いの？ つまり、私が貴女で貴女が私よ」

「おっとつと。どこまで私をコケにすれば気が済むのかなコイツは……」

パチュリー・ノーレッジ——の顔と体で机を神経質に指先で叩くのは、小悪魔の癖だ。中身がそうなのだから、しかし慣れ親しんだ行為に対して体の反応は鈍い。手足の長さが違うのだから、お決まりである私イラついてますよポーズのキレも悪かった。

愛しきねぐら、魔法図書館は普段のままだ。静かで薄暗く、広くて狭い。立ち並ぶ巨大な本棚の数々は整然と並び、知識を崇め蓄えるその神殿はむこう百年変わらなだろう。

しかし、今、変化が起きている。これは一体どういう事なのだと、魔女（小悪魔）は自分の顔に説明を求めた。

「……私は悪くない」

「出ました、はい出ました私は悪くない。どうしてそう素直に自分の非を認められないんですか？ 頭が悪いの？」

「使い魔の分際で、主人にむかってなんて口の利き方だ。いらいらしてきた」

「今はそっちが使い魔じゃないですか」

「そうだった……」

開いたページに両手を乗せ、肩を落とす小悪魔（魔女）に、おや、と魔女（小悪魔）は眉を上げる。不随意に、ふご、という鼻息が漏れてしまい、嫌そうな顔で半目を向けられた。

「わ、私は悪くないです」

「気持ち悪い。自分がそんな風に、へらへら笑っている所なんて見たくなかった。最悪の気分だわ」

「そっちですか。うーん、あのねえ、パチュリー様。そこは変な鼻息に文句を言うべきですよ。恥じらうべきですよ」

「やったのは私じゃなくて、貴女なんだから、どうでもいい」

「私は良くない。自分の主人がそこまでずぼらだと、知ってましたけど、思い出したくなかった」

「貴方の趣味がどうして私の——」

「はい、はい、どうでもいいですから、解決してくださいよ」

生意気な下僕にひとつぶちあげてやろう、と言葉の拳を振り上げた小悪魔（魔女）が雑に台詞を止められて、それは普段ならやってはいけないことの筈だ。付き合いの長い下僕である。うまく調子に乗らせて、手綱を取る事ぐらい出来る筈だった。

だが、非難する視線と一緒に遮られれば、それも強くは出れない。

小悪魔（魔女）は不機嫌ですとばかりに唇を尖らせ、言い訳の言葉を探し始めた。

S

始まりはいつだって唐突で、内容はいつだって素っ頓狂だ。寝て起きた魔女と小悪魔の、意識と体が入れ替わってはや一昼夜が過ぎた。解決法はまだ見つかっていない。

まだ見つかっていないのは、と紫色の髪を纏めながら、小悪魔は思う。珍しいことだ。信じられないと言っても良い。数刻ほど漫才をしておけば、それで解決する話だと思っていたからだ。

魔女、つまり今、小悪魔の体を動かしている陰気な女らしき存在は、魔の理と知の理に関して他の追従を許さない。無限知識集積存在ヴワル魔法図書館は、自らの管理者に対してあらゆる回答を用意しているのだ。解決するのに時間がかかるとは思えなかった。

思いもしない事は思った以上に起こるものだと、小悪魔は慣れない手つきで帯を締め、鏡に

向かって笑顔のチェックを行った。顔色の悪い、いかにも不健康そうな魔女の湿気た顔が奇妙に歪み、小悪魔を絶望的な気持ちに貶める。

「なんとという気味の悪い笑顔。なんとという似合わない格好。愛想とおしやれをどうやって回収すればいいんだろう、この体」

体が入れ替わっても、いや、そんな異変が起きたからこそ、日常業務を続けて心の安寧を保とうとするのは普通の行動だろう。しかしこれは、どうだ。鏡に写っているのは何時ものばかりキマったおちやめな美女ではなく、労働階級のコスプレをした陰険不健康女である。すでに頬の筋肉が引きつっている感覚がある。表情筋の一切が怠惰の権化なのだ。

諦めて小悪魔は鏡台から離れ、職場であり棲家である図書館のピロティに向かった。魔女は、つまりおちやめな美女の姿をした陰険根暗女は、本人にとっては定位置の椅子に半ば寝そべり、馬鹿げた分厚さの本を開いている。その姿に、小悪魔は蛙が潰れたような悲鳴を上げた。

「ぐええっ。やだやだ、なんですかその格好！」

「やだ……」

返事なのかなんなのかさえも分からない鳴き声が聞こえてきたので、小悪魔は反射的に魔女の頭を引つ叩きかけるが、相手は自分の顔をしているのだ。ややこしさと自己愛で右手が彷徨い、やむおえず床を殴ったらあまりの痛さにのたうち回るハメになった。

「ぐええっ！ 弱い、なんて弱さ！ どうなってるのこの体！」

白銀色しろがねの花と言えば、自然に存在しない造花のような表現です。ですが私が見たそれはまさしく自然で、そして優雅に美しく咲いていました。

優しい日差しが、厳しかった冬の名残を払拭する、そんなある日。木々と青草の間にひっそり咲いていた白い花は、私という妖精を生みました。通り過ぎる白銀色の花を見たとき、一瞬で彼女に憧れて、その後ろを付いていきたくて、生まれたのです。

彼女は人間で、名前は十六夜咲夜と知りました。染みも傷もない白い肌と、澄んだ湖面のような青い瞳、そして風に揺れて輝きを零す白銀の髪……異質なほど美しいのに清らかな生命の香りを感じる、造花のように完璧だけれど、優しい香りがする白銀色の花。彼女に近付きたくて、私は生まれて追いかけてきました。

十六夜咲夜は霧の湖に佇む深紅の館「紅魔館」に住んでいます。そこには恐ろしい悪魔がいて、彼女はそれに仕えていると知りました。

紅魔館では多くの妖精が出入りし働いていましたので、こっそり私が混じっても、誰も気づきませんでした。

壁も床も紅い館の中、白銀色の花は呑まれること無く凜と咲いています。その所作一つ一つ、私の心を様々に魅了していきます。例えば、十六夜咲夜はお掃除が終わって綺麗になった辺りを見回すと、小さな微笑みを零します。とても柔らかくて温かいそれは、冷たい金属のような白銀色にうつすら混じった、桜色のように見えませんでした。

あの咲き方に憧れて、私は彼女を真似るように、館の掃除を始めました。十六夜咲夜はまるで「時間を止めた」かのように一瞬で、かつ光り輝くほど完璧に終わらせるのですが、私にはそのような力はありませんから、それこそ日が昇ってから沈むまでの時間を費やしてしまいます。光り輝くこともありません。加えてこの館はととても広く、どこまでやればいいのか、いつになれば終わるのかも解りませんでした。さらにそうして時間が経てば、以前掃除した場所にまた微かな汚れが生まれています。それを見つけては、またそこを掃除し始めました。

そうして何日が経過したでしょうか。広い館の一部分を延々掃除し続ける私に、白銀色の花は気付きませんでした。館には本当に多くの妖精が住んでいます、妖精というのは基本的に気分屋ですから、みんな真面目に仕事などしません。その数で一つの仕事を何とか終わらせません。だから十六夜咲夜は、そういう妖精一人一人を憶えていないみたいです。

彼女を見られない時間はとても多いです。悪魔の傍に行ってしまうと、長い間戻ってきません。悪魔の力はここからでもひしひしと伝わってくるほど強く、迂闊に近寄ると私のような弱い者は、消えるか変質してしまうでしょう。だから怖くて、遠目に見える距離にも近づけません。

誰に知られる事なく、一人延々と掃除を続けるというのは、妖精に転じる前の花と同じであると思えます。それでもいつかは、真つ白な自分に彼女の色が少しでも宿ればいいなと、淡い夢を抱きながら。

数少ない館の窓から外に目をやると、灰色の雲が空一面を覆っていました。それは低くて、まるで天井のようです。やがてガラスに水滴がひとつ、ふたつ。一瞬の閃光が走った後に、館が揺れそうなほどの轟音が響きました。続けて、空からの落水が大地を激しく叩き続けます。それを聞きながら、私はいつもの掃除を始めました。最初に比べれば、我ながら慣れたものと思います。一つ処にかける時間も減りましたし、実感できるほど綺麗に出来ています。それも、あの人のように輝きはしないけれど。

不意に後ろから声をかけられ、私は驚きのあまり持っていた雑巾を落としてしまいます。夢中になっていたことと、外の音に耳を支配されていたことで、誰かがそこに居ることをまったく気付けませんでした。

振り向いた視線の先には、十六夜咲夜が……白銀色の花が咲いていました。憧れの彼女と目が合います。そして言葉をかけられましたが、残念ながら全て理解することは出来ませんでした。この辺りを掃除したのはあなたかと問われたみたいで、私は精一杯の意思表示として、小さく頷きます。

すると十六夜咲夜は、微笑んだのです。今までこっそり見ていた小さなそれではなくて、私が生まれた時に優しく包んでくれた、春の日差しのようなでした。そして、鳥の囀りよりも甘美な声で語りかけてくれます。褒めてくれていたみたいでした。

私の胸中にある小さな器は、簡単に決壊してしまいました。両目から、外の豪雨に負けない程の涙が溢れ、綺麗に掃除した床を汚してしまいます。白銀色の花が私を見てくれているのに、これでは失望させてしまう。急いで雑巾を拾い、綺麗にしなれば。

涙に濡れた頬に、柔らかい布が当たりました。床に落としていた視線を上げると、しゃがむ十六夜咲夜の顔がすぐ近くにありますが、彼女は少し困ったような、でも優しい微笑みと声をくられて、私の涙を拭きました。何度も何度も優しく拭ってくれました。そして頭を撫でられると、不思議なことに、あれだけ胸中で暴れていたものがすつと静まり、穏やかな幸福感だけを感じます。

外の雨は未だ降り続けていますが、私の頬はもう乾いていました。彼女に伝えたい思いはあるけれど、表現する言葉も声も持っていません。涙で熱くなった私の目は、湧き水の澄んだ冷たさを湛えるような、青い瞳に惹かれ続けます。

やがて十六夜咲夜は立ち上がりました。そして私を手招きします。付いていこうとして、そうだ掃除用具を持っていかなきゃと振り返ると、それは私の記憶する場所にありませんでした。辺りを見回せば、少し離れた彼女の両手に、私が使っていた雑巾やバケツがあります。いつの間にかどうやって取ったのでしょうか。不思議に思っても問うことは出来ず、彼女もただ私が来るのを待つだけでした。

揺れる銀色の髪に見惚れながら、誘われるままその背を追いかけます。窓のない薄暗い廊下、

レミリア・スカレットの一日は、太陽が山裾の向こうに沈んでから暫く。藍色が夕焼けの朱を塗り替えた頃から始まる。

ベッドの上で身を起こし、衣装部屋から溢れそうになる服の中から今日の一着を選び、友人がその昔拾ってきたという『吸血鬼でも映る鏡』などというご都合感溢れるマジックアイテムの前で身だしなみを整えて。寝室から出た時にはもう一分の隙も見せない、完全なる夜の王がそこに在る。

だがしかし。

夜の王。怪異の中の怪異。吸血鬼としてのオリジナル。

ご大層な肩書きを持つ彼女ではあるものの、だからといって常日頃から多忙に見舞われている訳でもなく。実態はと言えば、正しくその真逆だった。

「咲夜ー、ごはんー」

無駄に広い食堂で遅い夕食を食べ。

「暇だわー」

「私は本を読むのに忙しい」

友人の所へ遊びに行き。

「おやつー」

いい天気だったのでテラスで月を見ながらお茶菓子を並べ。

「ここにまだ埃が残って……ないな」

「当然ですわ」

館の中を適当にぶらぶらと歩き回って。

「ごはーん」

無駄に広い食堂で夜食を食べ。

「おやすみー」

寝室に戻って寝る。

以下、繰り返し。

それがここ最近の彼女、レミア・スカーレットの一日だった。

「完全無欠の絶対的なニートね」

「うるさいな、これでも色々と考えているんだよ」

「あら、また珍妙な催しでもやるつもり？」

「珍妙!？」

大図書館の一角。友人たる魔女、パチュリー・ノーレッジから予想外な口撃を受けて、レミアは撃ち抜かれたように上体を反らした。

「うわあ!？」

そして勢いのままに座っていた椅子ごと倒れて、強かに後頭部を打って悶絶する。

「何をしているのよ、まったく」

「いや……でもパチエにそんな風に思われていただなんて、心外だな」

戻した椅子に座り直して、気取ったようにテーブルに頬杖をつくレミリア。

その姿は一見すれば王の威厳、見る者を惹きつけて止まないカリスマに溢れているものの、後頭部の痛みに耐えきれず目尻に浮かんだ涙が、それら全てを台無しにしていた。

「好奇心旺盛なのはいいことだけれど、レミイはもう少し形式というものを尊重すべきだわ」
紅魔館で時折開かれる様々な催事。それは風の噂で伝え聞いた季節やどこかの地方のイベントを館で行うというものだったが、パチュリーの言うとおり、何をするにしても大枠としては元のイベントに沿っているものの、その中身はといえばレミリアの気まぐれで二転三転する、ようは暇つぶし目的なものが大半だった。

「アレと比べれば、私の壊し方なんて可愛らしいものじゃない」

「壊して良いものと悪いものがある、という話よ」

パチュリーの言葉を受けて、レミリアが『なんだそんなこと』とでもいうように腕を組んで、椅子の背にもたれかかった。

その際、いくらか慎重になつていたのをパチュリーは見逃さなかったが、それを言わなかったのは友としての優しさか、あるいはただ面倒なだけだったか。

「遊びは遊ぶからこそその遊びなのよ。パチエの言う魔法使いとしてのなんとやらならまだしも、

むしろ形式にこだわりすぎて物事の本質を見失ってしまった人間たちの方が、余程罰当たりだわ」

「……」

「なによその目は」

普段は眠たげに伏せられがちなパチュリーの目が珍しく見開いているのを見て、レミリアが訝しむ。

「いや、私が言ったことを覚えていたのが意外で」

「もしかなくても、パチュエは私のことをバカにしてないか？」

「……大事な友人をそんな風に思っている訳ないじゃない」

「本当にそう思っているなら、露骨に目を逸らさずに言っしてほしいものだけわ」
気が抜けたのか、レミリアがぐでつとテーブルに突っ伏す。

暇さここに極まれり、といった様相を呈したところで、タイミングを見計らったように音も立てずハイテイススタンドが二人の間、テーブルの中央に姿を現した。

置かれた、ではなく姿を現したというのは正しくその通りで、過程を飛ばして結果だけを取り出したようなそれを、しかし二人はさして驚いた様子もなく、もうそんな時間かとレミリアは上体を起こし、パチュリーは読んでいた本をぱたんと閉じた。

「お茶の時間ですよ」

遍く世の悉くを破壊するのは簡単な事だ。

でも、遍く世の悉くを創造するのはとても難しい。……らしい。

何故だろう。

“つくる”と“こわす”は表裏一体などではなく完全に別物だからだろうか。

分からないでもない。

こわすというのは本当に、すごく、いとも簡単な事だから。

それならば。

「そうだつくってみよう」

日付が変わった直後のフランドール・スカーレットの第一声はその様なもの。

然る後、彼女は弾け飛んだ。

美しい金髪が、白く滑らかな肌が、煌びやかで歪な翼が、無邪気な紅い瞳が、フランドール

を構成する諸々全てが破裂し、紅い部屋のそこら中に勢いよくプチ撒けられた。

そして――

「……………」

そんな唐突な凄惨の一部始終を見ていた存在が五名程。

誰もが紅い仮面を被った緑髪のメイド妖精達。青いスカートのメイド服を纏う彼女達は紅魔館内のそこらにいる雇われメイド妖精とは格が違う。

何故なら彼女達はシルキー。古い家屋敷にいつからか存在するようになる妖精で、この場に居る以上紅魔館の妖精とも言うべき存在だ。ただ基本的に地下でフランドールの世話を任されているため、彼女達の事を知る者は紅魔館内でもそう多くはない。

ともかくいつも通りはたと宙を眺め心がどこかへ旅立ってしまったフランドールは、いつも通り何事か言ったかと思うと、少しいつも通りではない事に弾け飛び、時間が経過する事……そろそろ二分。

シルキー達は微動だにしないものの、仮面の下の素顔には微かに冷や汗が出始めていた。

別にフランドールが自分で自分を壊すのはそこまで珍しい事ではないが、吸血鬼らしく復活するまでに間があると完全に壊れてしまったのだろうかとか心配にもなる。或いは——何がとは言わないが、こう、少しずつ悪化していつているのでは、とも。

やがて三分が経とうかという所でフランドールの欠片がそこかしこで痙攣し始め、飛び上がり、空中の一つ所に集中して何やら煌びやかなものが混じった肉塊というグロテスクな蛹を形成したかと思えば、そこから蝶が羽化するようにフランドールは再誕した。

吸血鬼らしからぬ復活の仕方にシルキー達は顔を見合わせそうになつたが、紅い床に落ちた抜け殻が潰れた音がいやに硬質に響いたので動作は中断される。

「できたー！」

そしてフランドールの嬉しげな満面の笑みだけを見れば百点満点。

例え裸であろうと大した問題では無い。

空中で五体を十全使って喜びを露わにするフランドールにシルキー達は惜しめない拍手を贈り、内二名が彼女に新たな服を着せようと紅いクローゼットの方へ飛び寄った。

「あっ」

それは誰の声だったか。

拍手は止み、拍手をしていたシルキー達の弾ける音、飛び散る音、そして撒き散らされた音が幾重も響く。

誰がやったかは明白で、それをされた三名は既に原形を留めず、だが残りの二名は手際よくクローゼットから服を取り出しており特に気に留めた様子はない。

そうして生き残りのシルキー達は未だ機嫌の良さそうなままのフランドールの方へ躊躇無く近寄ると、手早く服を着せ始めた。

別に珍しい事ではないのだ。

フランドールの世話をするという事はいつでもフランドールに爆ぜさせられる事でもあり、前兆も何も無くただ気紛れにシルキーはその数を減らされている。

とはいえ己や同僚の突然の死は彼女達にとってそう重いものでは無い。

紅魔館の妖精であるからいずれまた紅魔館内に復活するという余裕もあるが、これが日常と環境に長く在れば自分達の死に対する頓着は消え失せて当然だ。

服を着せられ、サイドテールに纏められた髪にリボンを結ばれ、帽子を被せられ。すつかりいつも通りの格好に戻ったフランドールは礼も無く紅い床に降り立つと、あちこちうろろしてはしゃがんで何かを拾い集めはじめた。

シルキー達は顔を見合わせ、同じ疑問と不明の解答を視線で交換し合った後、フランドールを追って床に降り立つ。

見ればフランドールはシルキーの欠片、即ち血肉を拾い集めている様だ。それも楽しげに。彼女が突飛で異常な事をするのはそう珍しい事ではないとはいえ、改めてシルキー達は顔を見合わせ、同じ疑問と不明の解答を視線で交換し合い、見守る事にした。

——乞われない限り余計な事はしない。

シルキー達が得た地下での過ごし方だ。

勿論、しなくてもしても死ぬ時は死ぬ。だがしない方が圧倒的に死に難いのは確かなのだ。

それにフランドールの行動について彼女自身からこちらが明瞭に理解できる回答が得られる訳も無く、であれば尚更口出しや忠告、手伝い等は控えられていくのが自然となった。死が日常であっても死なずに済むなら死なない方が良いに決まっている。

鼻歌すら混じり始めたフランドールの落ち骸拾いを二人のシルキーが眺める事……七分。